



第608号

「島のひろば」編集委員会

電話 04992-2-8256

Eメール・jcposhima@yahoo.co.jp

www3.plala.or.jp/jcposhima/

(検索サイトからは「日本共産党 伊豆大島」)

くらしの相談は共産党町議団へ
山田2-3670 橋本2-3614 小池2-9318

町民アンケート結果報告



小池しょう 橋本ひろゆき 山田ただたか

ご協力ありがとうございます

ございました

2019年2月

日本共産党

大島町議団

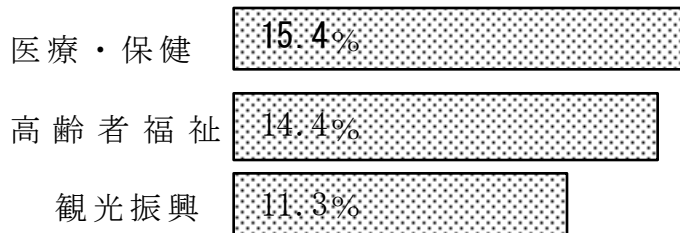
皆さんの声が生きる温かい町政へ がいっしょに

(日本共産党大島町議団の見解を紹介します)

共産党大島町議団が昨年実施した町民アンケートには前回より30人多い230人余の方からご回答を寄せていただきました。皆さんの声は、町議団の町政政策に採り入れさせていただきました。ご協力ありがとうございました。結果をご報告いたします。(紙面の都合で上位3項目まで)

なお、回答者の世代別割合は、10代～50代が23.7%、60代以上が76.3%でした。この点を前提に結果をごらんください。「回答者の声」は、446項目にのぼり、ごくごく一部の紹介です。

1、大島町政で特に力を入れてほしいこと。

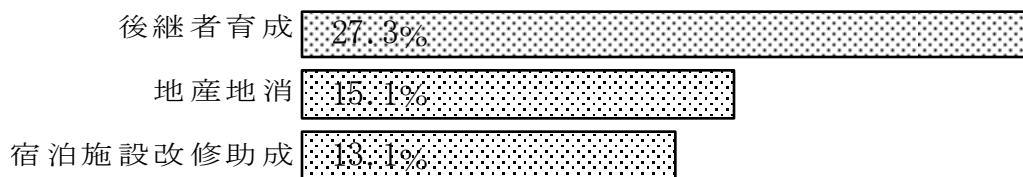


- できれば自宅で最期を迎えたい。それを可能にしてくれる訪問医療の充実を。
- 男性に対してもっと気軽に介護予防教室に出られる工夫をしてほしい。(ポイントをつけたりとか)(60代 女)
- 初島の「アスレチック」のようなものがあると若い観光客が来てくれそう。もっとリゾートっぽい所がほしい。(20代 女)
- 食事施設が不足。改修・増設へ補助金が必要。(80代 男)
- 住民増を目ざしてるのに住む所が少ない。

回答者の声から

- 年金生活で、やむなく病院通い。宿泊代を払って交通費、病院代と、とても大変です。早く死にたいです。(66歳 女)
- 島外医療の町の交通費などの助成制度の広報をもっとつよめてほしい。

2、農林・漁業・観光商工振興に何が必要か。(観光振興 上の1の続き)

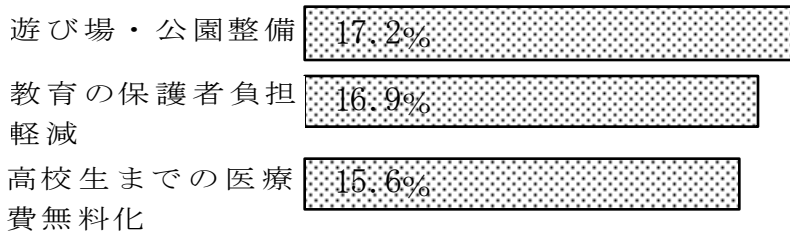


- (食事処・レストラン棟の整備)観光客がランチ、夕食をとるのに困っている現状があるのをご存知だろうか。素泊まりの客が増える一方、食べる場所がない。(50代 女)
- 椿まつり、各地区の民話(語りべ)・踊りなど一般町民参加で大島らしさを引き出せるのではないか。(60代 女)
- 夏まつりのようにみんなで盛り上げたいですね。

回答者の声から

- 業種を問わず、大島の未来のために後継者問題は急務です。40代 男)
- 地産地消一層の努力で島に来たら島の野菜・魚、海草が食べられるように。(70代 男)

3、子育て支援・学校教育で何を望むか



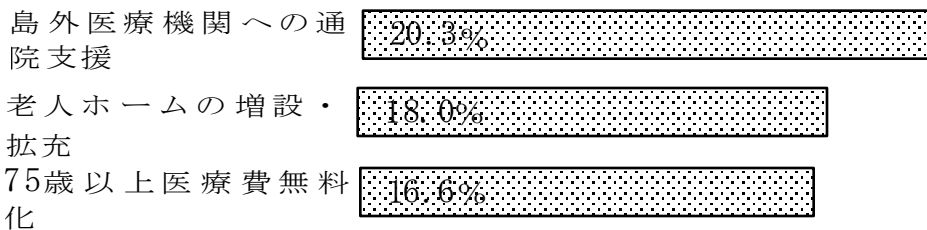
回答者の声から

- (公園など)乳幼児だけでなく、小学生～高校生くらいまでが楽しめる整備・拡充だと島がにぎやかになって

ていくと思う。(20代 女)

- 給食費や教材費などがかなりかかります。少しでも補助していただければありがたいです。(50代 男)
- 家庭科セットなど学習用具は、学校備品として貸与制度に。(70代 女)

4、医療・介護・高齢者福祉に何を望むか



回答者の声から

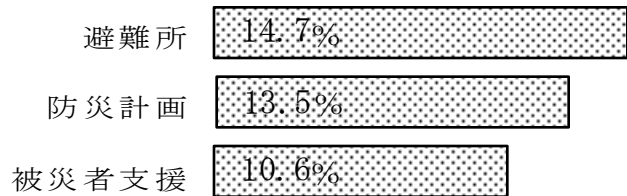
●健康づくり、介護予防は車いす生活、寝たきり老人化を先送りする方法の一つではないか。(80代 男)

●DVDづくりとして、大島体操(神津島でつくった)大島でも。(70代 女)

●少ない人口だからこそ、啓発次第で健康診断・がん検診受診率が全国No.1を目ざせる。(40代 女)

●老人ホーム人材確保にはそれなりの保障(賃金や労働時間の改善など)も必要。高齢社会になっていく中で若者の仕事にもつながる。(60代 男)

5、被災者支援・復興計画について



回答者の声から

●単身赴任で災害時の避難名簿をもらったが、どこに誰が住んでいるのか分からず、いざという時不安。(20代 女)

●町の防災無線放送が良く聞こえない

いゆっくりと、ていねいに、はっきりと言葉に注意してほしい。

●避難所はなるべく空き家などを利用して、日常の暮らしに近づけてほしい。体育館は高齢者・乳幼児にも全く不向きです。(70代 女)

●高齢者が多いのに避難所に洋式トイレがない。土足で上がれないなど不便。早急に整備を。(60代 男)

6、町・議会・共産党などへの意見や要望(ここでは共産党への声のみ掲載)

回答者の声から

●共産党は何をするか。大島を観光都市とするため何が大事か考える。クレーム集団であってはならない。(60代 男)

●小さいことはもちろん大事だが、共産党には

なグランドプランがない、又は見えない。最も力を入れなければならないことを精査し、将来をどうするのか示すべき。(60代 男)

●共産党の議員の皆様、島民の身近な支援いつもありがとうございます。(70代 女)

大島文学・紀行散策

拾遺編

青山光二再び

絶筆「あゆべよ」のこと

五

480

收容少年の暴動

既述のように、梶木は、「東大文学部教育学科を今年卒業し…その年の夏」六踏園に赴任したとあるが、梶木のモデルを作者の青山自身であると仮定すれば、青山が卒業したのは、東大文学部美術科(フランス文学科も夏に卒業)で、1937年(昭和12)24歳の時である。

この仮定を前提に話を進めると、梶木が赴任する6年前の1931年6月9日に、「不良少年を更生させたい」という創立者の思いをよそに少年たちによる「暴動」事件が起きている。六踏園大島農場は、司法省(現法務省)の監督下にあり、少年は、少年審判所で要保護と認められた者のうち、程度の甚だしい者を留置所から引き取り收容していた。中には、判断を誤り法的に司法矯正院(現在の少年院)に送致すべき少年たちも收容されていて、彼らが暴動の中心になったと云われている。

当時の新聞は、「九十余名の不良少年、收容所を破って暴行 鎮圧の職員等重傷を負ふ 大島六踏園の惨劇」とセンセショナルな大見出しを躍らせて報道した。全国紙だけでなく、地方紙も取り上げ、さらにロンドンタイムス紙までも報道、国内外に知れ渡った。

暴行をうけた職員たちの数人は、当時六踏園の近くに開校したばかりの大島農芸学校の伊藤七雄校長らに保護されたというエピソードも残っている。

暴動を決行したことについての少年たちの言い分は、「食事の対応が非常に悪く、農作業が過酷だった」ためと、園側は、「船の都合でやむなく芋で間に合わせたり、減食したことはあったが、常時ではない」と反論している。

この事件は数日で終息しているが、改めて一宗教団体の善意だけでの矯正事業の難しさを全国に投げかけた不幸な「事件」であった。

当時の新聞は、「九十余名の不良少年、收容所を破って暴行 鎮圧の職員等重傷を負ふ 大島六踏園の惨劇」と



農作業する少年たち

(次号へつづく)